

日本とドイツにおけるリソグラフ文化の現在

山口 遙子

独立行政法人日本学術振興会特別研究員(PD)、早稲田大学・成城大学非常勤講師

Risograph Culture in Japan and Germany Today

Yamaguchi Yoko

Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science (PD),
Part-time lecturer at Waseda University and Seijo University

Abstract

The term “Risograph” refers to both a stencil duplicator developed by the Japanese company RISO Kagaku Corporation and the prints made with it. This paper explores Risograph's emergence as a new art medium among young people in Germany and Japan. Examining why Risograph has resonated with today's youth leads to an inquiry into what they seek in art. Drawing insights from the activities and statements of Risograph artists in Germany, this paper scrutinizes three perspectives: the constraint of limited ink colors, the ease and imperfection of duplication, and the alignment with ecological concerns. Despite its origins as an office tool, Risograph's constraints intrigue artists, while its simplicity resonates with the democratic principles of contemporary art. This paper underscores Risograph's unique appeal, positioned at the intersection of artistic innovation, accessibility, and environmental consciousness.

1. はじめに

「リソグラフ」(Risographie; Riso [独]/ Risograph; Riso [英])とは、理想科学工業株式会社という日本企業が開発した孔版印刷機、およびこれを用いて創作された印刷物を指す。本論は、現在10-30代の若者世代を中心に、ドイツと日本において新たなアートメディアとして浸透しつつある「リソグラフ」の現状について概説し、またリソグラフがなぜ現在若い世代にアートメディアとして広く受け入れられているのかを検討する。リソグラフが若い世代に広まった原因は、次の三点にまとめられる。①インク色の不自由さが逆説的にもたらず創造性、②複製の容易さとアンコントロールビリティ、そして③エコロジーとの親和性である。

国内ではリソグラフはいまだ学術的調査研究の対象にはなっていないが、国外ではすでにリソグラフの研究拠点やアーカイブが複数存在し¹、ドイツにも「Herbarium-Riso」と名付けられたアーカイブが2010年からベルリンで運営されている。リソグラフに関する先行文献としてはジョン・コムルキによる『リソマニア：印刷の新たなスピリット』(John Z.Komurki, *RISOMANIA. The New Spirit of Printing*. Salenstein: Niggli Verlag/Berlin: Vetro Editions, 2017)

や、スヴェン・ティラックによる『エクスプロリソ：ローテクなファインアート』（Sven Tillack, *Exploris: Low-tech Fine Art*. Leipzig: Spector Books, 2021）等の単著があるが、何れも日本国内の資料を十分参照しているとは言い難い。そこで本論ではリソグラフ発祥地の観点から、ドイツおよび日本におけるリソグラフ文化の展開を論じたい。

2. 「芸術実践」としてのリソグラフ

「リソグラフ」は、理想科学工業株式会社という日本の企業が1980年に発表した孔版印刷機シリーズに名付けた名称である。とはいえ、国内ではリソグラフよりもむしろ「輪転機」あるいは「ガリ版印刷機」といった一般名詞のほうがなじみ深い。リソグラフはいわゆるコピー機（レーザープリンター）とほぼ同じような外見をしているが、内部機構が異なる。レーザープリンターは、最大4色のトナー粉末をレーザーで熱して紙に付着させることによって印刷する。一方、リソグラフは細かい穴があいたマスターを制作し（孔版）、単色インクが入った回転ドラムからそのマスターを通じてインクを押し出して紙に載せるものであり、都度一色ずつしか刷ることができない。デジタル的に出力されるレーザープリントに比べて、アナログ的な孔版を用いるリソグラフはカスレやズレが生じやすいが、ある程度多くの部数を印刷する場合はより安価で高速である。そのためリソグラフは、印刷品質が低くても構わないような印刷物をつくるための事務機器として、学校、公民館、スーパーマーケットなど私たちの日常生活の隅々で使われている。

さてこうした日本国内でのイメージに反して、ドイツ語圏をはじめとする欧州および米国において「リソグラフ」という語は、単なる一企業が作った日用的な事務機器であるという以上の意味を付与されているようである。その証左として、現在ドイツには「リソグラフ・スタジオ」を名乗るグラフィックアートの創作拠点が72箇所も存在する²。いずれも理想科学工業株式会社とは無関係である。これらは、個人あるいは小規模団体が自ら任意の原稿を持ち込み、そこにあるリソグラフ機器を用いて、自ら印刷物を制作するための空間である。個人や少人数によるコレクティブによって運営されている場合が多いが、公共サービスとして自治体によって運営されている場合もある。個人によって運営されているスタジオの一つ、ベルリンの「we make it/Herbarium-Riso」は、自らを次のように規定している。

これは芸術的・政治的実践を行う場所であり、セルフパブリッシングの根源と向き合う空間である、と私たちは考えています。自己実現を後押しし、芸術・政治・情報を民主化し、可視化し、アクセス可能にすることを後押しします。そしてまた低予算・無予算で、印刷機械を持たず、共同作業を必要としている人の必要にも応えます。³

この言明が示しているように、リソグラフ・スタジオは単なる事務的なコピーセンターではなく、むしろ「芸術実践」「政治実践」を行うための印刷所として捉えられている。「セルフパブリッシングの根源と向き合う」とは、芸術・政治・情報の「民主化」(democratization)のツールとして、あらためて印刷を捉え返すということであろう。リソグラフ・スタジオによって可能になるのは、一人の権威ある美術家が制作し、美術館に飾られているような既存のアートではなく、誰でも自ら制作し、印刷機で複製し、シェアするという民主的なアートのあり方である。あるいは、特権的な少数に主導権を委ねるのではなく、印刷を通じて知識や意見をシェアするという民主政治のあり方である。

では、なぜ「リソグラフ」が芸術や政治の「民主化」のためのツールとしてとりわけ好まれるようになったのだろうか。なるほど、日本でも印刷速度やコストの面から、リソグラフは政治ビラを作るのによく用いられた。リソグラフは、一分あたり190枚の印刷が可能であるという⁴。対して、レーザープリンターは一分あたり20枚ほどの速度である。また、セルフパブリッシングに適した百～数千ほどの部数を印刷する場合には、コストの点でもリソグラフの方が安価である。とはいえ、いくら速くてもリソグラフは単色印刷機であり、複数の版を重ねて印刷すればズレたり掠れたりするしで、政治ビラには足りてもアートの用には適さない、というのが国内における一般的な認識であろう。そのため日本でリソグラフは事務機器の域を出なかった。対してドイツではリソグラフは「芸術実践」に結びつけられ、先に挙げたスヴェン・ティラックの著書のタイトルにあるように「ファインアート」とも呼びうるメディアとして見なされている。一体リソグラフの何が、若いアーティストたちをこれほど惹きつけたのか。それは以下に示すような三点が考えられる。

①インク色の不自由さが逆説的にもたらす創造性

第一に、リソグラフに用いられるインク色の不自由さが挙げられる。リソグラフは日本においてあくまで事務機器としての実用性を追究して開発されたため、通常のフルカラー印刷には不向きであり、その他のフルカラー印刷機と比べて発色のコントロールは不自由である。しかしこの不自由さが、逆説的にアーティストの創造性を刺激したようである。その逆説を論じる前提として、日本におけるリソグラフの開発過程について述べておきたい。

リソグラフの原点は、鉄筆で蠟引きの紙をガリガリと削って版を作り、その版を通してインクを紙に謄写する「ガリ版」である。国内では19世紀末から1960年代にかけて、事務から文化・社会活動まで広い用途に用いられていた⁵。リソグラフを開発した理想科学工業

株式会社の創立者である羽山昇も、敗戦後1946年に大学入学と同時に生計を立てるためにガリ版職人としてキャリアをスタートしている⁶。まもなく「理想社」の名前で謄写版印刷業を開業し、しばらくイギリスからの輸入品インクを用いていたところ、船便輸入の不確実さなどからインクの開発も手がけるようになり、1954年に最初の自社製インク「RISOインク」を発表した。さらに1960年代後半からは印刷機そのものの開発に着手し、1977年にB6サイズの家庭用孔版印刷機「プリントゴッコ」を発売したのち、1980年に「リソグラフ」を発表し、翌々年にはハノーファー・メッセにこれを出品している。

以上のようにリソグラフはガリ版を原点として開発された印刷機であり、専用インクもまたガリ版の発想から開発された。したがってフルカラー再現のためにプリンターでよく用いられるシアン、マゼンタ、イエロー、ブラックの四色に対応するようなインクは作られず、あくまで単色ごとのニーズに答える形で、すなわちまず黒色、次に学校用に朱色、葬式用に灰色、あるいは取引企業から大量購入の希望が出ればその色を、といった具合に一つずつインクが開発されていったという⁷。現在リソグラフの「基本色」として販売されているのはブラック、グレー、ライトグレー、レッド、ブライトレッド、リソーマリーンレッド、バーガンディーレッド、ブラウン、イエロー、グリーン、ティールグリーン、ブルー、ミディアムブルー、リソーフエデラルブルー、パープル、蛍光ピンク、蛍光オレンジの17色である。赤が四色、青が三色あるのに対して黄色は一色しかないなど、色数に偏りがあるのはこうした開発の経緯が関わっているのだろう。

さて、このインクのラインナップの特殊性こそ、リソグラフのアート化の重要な契機の一つとなったと考えられる。通常のインク色によるフルカラー再現ができず、なかばランダムに開発された17色のインクの組み合わせで望みの色を表現しなければならないという制限が、却ってアーティストを刺激した。「Perfectly Acceptable Press」という米国シカゴのリソグラフ・スタジオを運営するマット・デイヴィスは、「リソの興隆」と題されたオンラインのインタビュー記事中で次のように述べている。

標準のオフセット色域外にある色の組み合わせを見ることは、我々のCMYKで飽和した視覚に、本質的なインスピレーションをもたらします。⁸

CMYK（シアン、マゼンタ、イエロー、ブラック）の4色の組み合わせによって、理論的には全ての色調が再現できるとされているため、フルカラープリンターの中にはこれら4色のインクが入っており、あらゆる色はこれによって表現される。私たちはこの4色の組み合わせによる印刷物に取り囲まれている。しかし既存の色表現で「飽和した視覚」を持って余していたデイヴィスのようなアーティストたちに対して、リソグラフの単色の組み

合わせの自由は新たな表現の幅を与えることとなった。例えばあるアーティストは、8版を重ねて色を作り出すことによって、通常のCMYKを使用したフルカラー表現を超える重厚さ、絢爛さ、ディテールを出すことに成功している⁹。

なお各リソグラフ・スタジオは、それぞれの懐具合に合わせた数のインクを備えている。基本色17色のうち、5~6色しか持っていないスタジオも、30色近く持っているスタジオもあるが、各々がその制限の中で「視覚の飽和」を打ち破ることに挑戦していると言える。

②複製の容易さとアンコントロールラビリティ

第二に、リソグラフを用いた複製の容易さとアンコントロールラビリティが挙げられる。リソグラフは、レーザープリンターなどのデジタルコピーと同じくらい簡単に製版・複製を行うことができる。扱うために特殊なトレーニングや職人的技術が要らない印刷機である。この点がまず、民主的なアートメディアとして若者たちの支持を得るのを後押しした。

とはいえリソグラフは、デジタルコピーのように正確な原版の再現ができない。しかしその即興性・予測不可能性が、作品の芸術性を損なうのではなく、むしろ高めると理解されていることに注目したい。ドイツのベルリンにあるリソグラフ・スタジオ「Woelfins Risographie」のオーナーは次のように述べている。

私が特に面白いと感じるのは、リソグラフが他のどのデジタル印刷方式とも異なり、芸術的なプロセスそのものに介入するということです。リソでの印刷はまるで、作品の最後に加える一つの材料のようなものです。何が生まれるかをあらかじめ分からないままに行うのです。リソグラフは、デジタルなデザインやオリジナルの作品を正確にコピーするということは意図していません。その逆です。アーティストとして、私はリソグラフに少しのコントロールを委ねてしまいます。そしてその結果、ほとんどいつも、何らかの仕方で私を驚かせてくれます。¹⁰

リソグラフを用いた複製のプロセスにおいては、ズレ、掠れ、色むら、混色、インクが手につくことによって生じる汚れなどが不可避である。これは原版からの逸脱として通常は忌避されるが、リソグラフに取り組む若者たちはこれをむしろ「作品の最後に加える一つの材料」、すなわちクリエイションのプロセスの一部として捉えている。芸術創造における全てのプロセスを自分でコントロールしようとするのではなく、自らの力の及ばないものをむしろ積極的な価値と見るという点で、リソグラフは脱人間中心主義という現代に顕著な思想的動向とも響き合うものである。

③エコロジーとの親和性

第三に、若い世代のアーティストの多くが有するエコロジーへの関心に合致したという点が挙げられる。カールスルーエにある「Buero Nashi」というサステナブルであること（Nachhaltigkeit）をその仕事の中核に据えているデザイン事務所は、現代のデジタル社会において、「触覚的なもの」（etwas Haptisches）が若者世代に語りかける特別な魅力について語りつつ、その一方でインクや紙などの資源を印刷に用いる際にはサステナビリティを最大限に考慮する必要があると指摘する。そして、その両方の要求を満たすのが、リソグラフであるという。彼らは(1)インク、(2)紙、(3)印刷工程の3点から、他の印刷方法と比べて、リソグラフがとりわけサステナブルな印刷方法だと結論づけている¹¹。

(1)インクについて「Buero Nashi」は、「いずれも食品産業廃棄物である大豆油または米ぬか油をベースにしているため、非常にサステナブル」と評価している。なお実際はこの理解は少し古いものであって、リソグラフィックインクはかつて黒色以外は輸入大豆を原材料としていたが、現在は全色国産米ぬかを原材料としたライスインクである¹²。また(2)紙についても、リソグラフには「再生紙や、表面がざらざらした紙一般に特に適している」。そのため、例えば彼らはシュトゥットガルトの「Metapaper」というメーカーによる風力発電1000%で作られた再生紙をリソグラフと共に用いて、よりサステナブルな印刷を達成している。(3)印刷工程については、リソグラフは「他の印刷工程と比べてほとんどエネルギーを用いない」とされる。レーザープリンターは一枚一枚印刷するごとに熱を発生するが、リソグラフは版を作成する時の一度しか熱を出さない。その上、シルクスクリーン印刷機のように、洗浄に化学薬品や大量の水を必要とすることもない。

以上のような点で、リソグラフはエコロジーへの関心が高い文化的な若者たちの支持を受け、価値化されている。

3. 結論

現在の若者の間でリソグラフがなぜ求められたか、翻って、現在の若者が求めているのは何か。この問いに対して本論ではドイツのリソグラフィックアーティストらの活動や表明に即して、①インク色の不自由さが逆説的にもたらす創造性、②複製の容易さとアンコントロールビリティ、そして③エコロジーとの親和性という三つの観点から考察した。日本の事務用品を出自とするため、本来はアートには向かないさまざまな制約を持つが、それがかえってアーティストを惹きつけた。また同時に、事務用品として作られたが故の創造工程の容易さが、アートの民主化を求める若い世代の芸術観に合致したのだと言えよう。

日本でも2018年に「Hand Saw Press」というリソグラフィック・スタジオが生まれ、国内のリソ

グラフィックを牽引している。本研究の資料の大部分はこのスタジオを菅野信介氏と共同主宰する安藤僚子氏から提供されたものである。ここでは政治、アート、情報の民主化を求める日本の若者たちが毎日足を運び、リソグラフによって発信を続けている。デジタル媒体では見ることのできない若者文化の活発な側面を垣間見ることができる、貴重で刺激的な場所である。

参考文献

Tillack, Sven. 2021. *Exploriso: Low-tech Fine Art*. Leipzig: Spector Books.

Komurki, Z. 2017. *RISOMANIA. The New Spirit of Printing*. Salenstein: Niggli Verlag/Berlin: Vetro Editions.

志村章子『ガリ版ものがたり』(大修館書店、2012年)

『理想企業創業50年 孔版とともに歩んだ半世紀』(理想科学工業株式会社、1997年)

1 マーストリヒトにある大学院大学ヤン・ファン・アイク・アカデミー (Jan van Eyck Academie) の「印刷出版研究室」 (Printing & Publishing Lab) はオンラインでも研究成果を発表し続けており(<https://www.janvaneyck.nl/>)、2012～2020年には「Magical Riso」と題した主催会合を毎年開催していた。

2 Issue Press, “AN ATLAS OF MODERN RISOGRAPHY.” 最終アクセス：2024年4月1日。

(<https://www.stencil.wiki/>)

3 Gloria Glitzer, “Herbarium-Riso.” 最終アクセス：2024年4月1日。

(<https://herbarium-riso.com/contact>)

4 理想工業株式会社「リソグラフSF939/939G 生産性/経済性」最終アクセス：2024年4月1日。

(https://www.riso.co.jp/product/risograph/sf/sf939_939g/about/speed.html)

5 志村章子『ガリ版ものがたり』(大修館書店、2012年)

6 『理想企業創業50年 孔版とともに歩んだ半世紀』(理想科学工業株式会社、1997年) pp. 6-21.

7 東京都品川区にあるリソグラフ・スタジオ「Hand Saw Press」を運営する安藤僚子氏が営業社員から聞いたという。

8 Garrick Webster, “The Rise of Riso.” 最終アクセス：2024年4月1日。

(<https://www.commarts.com/columns/the-rise-of-riso>)

9 Jan van Eyck Academy & the Authors, *Magical Octopus Magical Riso*. Centum Nec Plura VI, 2020. ページ番号無し

10 Sophia, “woelfins Risographie.” 最終アクセス：2024年4月17日。

(<https://www.risoprinter.de/de/referenzen/woelfins-risographie>)

¹¹ Buero Nashi, “Nachhaltiger Drucken mit der Risographie.” 最終アクセス：2024年4月17日。
(<https://bueronashi.de/nachhaltiger-drucken-mit-der-risographie/>)

¹² 理想科学工業株式会社「環境に配慮した高品質な孔版インク ライスインク」最終アクセス：
2024年4月17日。 (<https://www.riso.co.jp/product/risograph/eco/riceink/>)